6）軍陣歯科学（第1報）

—三内軍医正，口腔外科学—

The Military Dentistry (1st Report)
—Oral Surgery written by Dr. Sannai—

日本大学松戸歯学部　○落合　俊輔
中村　一
坂元　雅明
出地　弘
谷津　三雄

Shunsuke Ochiai, Hajime Nakamura, Masaaki Sakamoto, Hiroshi Shicchi, Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

陸軍軍医学校令は明治21年に発令されたが，日露戦争における経験より大いにその必要性を認められた口腔外科が，軍陣外科の一分科として軍医学校に設けられたのは，明治39年の事であり，その教育には東京大学の石原久があたった．明治41年6月1日，陸軍軍医学校に診療が開部設されたが，歯科は隔日交代に耳鼻咽喉科と教室を共用していた．明治42年1月陸軍軍医学校に，初めて二等軍医岡島格が初代の口腔外科の専任教官として任ぜられた．そして大正5年それまで陸軍軍医学校嘱託として口腔外科学を講じていた石原講師が解職となり，口腔外科学の教育および診療は岡島教官の管理となった．大正7年岡島教官が転出し，一等軍医三内多喜治が第2代目教官となった，昭和4年3月陸軍軍医学校は麹町区富士見町より牛込区戸山町（現国立医療センター）に移転した．

昭和6年，満州事変の勃発となる，本事変における顔面顎部戦傷の陳旧性にして長期間の特殊治療を要する者は内地に送還され，臨時東京第一陸軍病院に収容し，軍医学校において手術や治療を行った．本事変において顎骨骨折に対する処置として各種の副木が考案され，いわゆる三内式線副子も開発された．三内軍医については上野正先生（教授）が「続々いわでもかな—老いの語り—」（昭和63年6月刊）の13ページに「三内氏は陸軍軍医に進まれ，軍医の最高位の少将まで昇進され，陸軍軍医学校の口腔外科主任をつとめられた．三内式線副子の開発グループのヘッドであった」と記載されている．

一方，昭和48年9月22～26日に中原実会頭の下に行われた第13回日本歯科医学会総会の併催行事として，戦後初めての歯科医史展が鈴木先生，今田先生，河越先生，そして医歯薬出版の中上氏および日本大学松戸歯学部らが中心となり，日本全国の篤志家から借用した資料をもとに開催された．その時，陸軍軍医学校に勤務したことのある中上氏が前武蔵野赤十字病院副院長，佐藤正一郎先生や，川又俊夫先生に呼びかけ陸軍軍医学校口腔外科で行った顔面，顎，口腔戦傷外科の写真や資料を展示することができた．

その時の資料を，中上氏が一時今田見信先生の会長室に置かせておいたものを，日本大学松戸歯学部資料室での保存が最良の方法だと話し合いがついたからといって持参してきてくれた箱の中に「三内軍医正，口腔外科学」という謄写版刷りの13ページよりなる小冊子がある．今回この「三内軍医正，口腔外科学」を参考資料として軍陣歯科学史の一端としたい．

本書に奥付け等はなく発行の年月日などは不明である．また，目次はなく，まず1～2ページに日本語とドイツ語で歯科医学の分類が横書きにされており，歯科医学 Zahnheilkunde に始まり，1．歯科保存療法学，2．歯科技工学，3．外科的歯科学，4．基礎的歯科学などの記載がある．

しかし，本文は縦書きで，口腔外科学，三内軍医正，とあり「歯牙硬組織及歯牙軟組織ノ組織解剖ノ概要（特ニ診断治療的ニ肝要関係アル条項ヲ指示）からはじまり，その内容として「歯牙硬組織」，「歯牙軟組織」を挙げている．ついで，「軍隊ニ多発スル歯科疼痛ノ病理各論，診断及其ノ治療」と題し，「歯牙疼痛ノ病理各論」（1）齲蝕症の存在する場合の歯牙疼痛，（2）齲蝕症の存在せざる場合の歯牙疼痛を挙げており，7ページには，智歯難生の項に「年齢の関係上，軍隊に多発す」と書かれてある．さらに，「歯牙疼痛ノ診断」，「歯牙疼痛ノ療法」（対症的療法ト根治的療法トニ

就テ）などが挙げられている．11ページには，Fisher 氏の野戦歯科療法について，野戦における歯髄失活法について，また，軍陣歯科における歯髄の切断術についてなどの記載があるがどのような特色のある治療法であったのであろうか．本書は，全体として教科書というよりは講義の指針を示した小冊子といえるものとなっていた．

7）軍陣歯科学（第2報）

—満州事変における歯科巡回診療時携行材料に就て—

The Military Dentistry (2nd Report) —On the Dental Materials of traveling Dental Examination at the Manchurian incident—

日本大学松戸歯学部　○馬渡　亮司
大石　和久
吉田　和子
鈴木　邦夫
谷津　三雄

Ryoji Mawatari, Kazuhisa Ohishi, Kazuko Yoshida, Kunio Suzuki, Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

川又俊夫（陸軍軍医学校口腔外科，主任松本秀治教官）が「軍陣歯科の回顧—厚生歯科学會，昭和16年総会講演要旨—各戦役に於ける我が軍陣歯科の変遷」において「昭和6年満州事変の勃発となった，事変当初にあっては派遣各大部隊に衛生班が編成せられ，これに歯科医一乃至二配属となり，歯科医は衛生班主力と行動を共にし各地に診療所を開設し又単独にて遠隔の各部隊に出張或は巡回診療を行った．次いで現地に陸軍病院開設せらるるや歯科医の採用配属となり或は衛生班付歯科医の転属となって全満全軍の歯科診療に遺憾なからしむるに至った．歯科用衛生材料に就ては，衛生班は歯科医を携行し，開設の陸軍病院は病院用歯科器械を備付けた．各地部隊への出張，巡回診療には馬車，汽車，船舶，飛行機等あらゆる交通機関を利用し，護衛を付け時には単独にて分散せる各地の部隊に行動せり随って行動に便なる様携帯行器械の重量及容積に最小限の制限が行はれる．治療椅子は出張，巡回診療時には携行用難にして現地に於て椅子等を適当に改造し或は支那人理髪椅子を利用した．尚，治療椅子は普通椅子に安頭台を考案付着して使用せり．又，支那理髪椅子の利用も便利なり，抜歯には普通の寝台を利用したり」と報告している．

そこで，陸軍歯科医加藤敏夫が昭和8年7月19日ハルピン衛戍病院ニ於テ第十師団衛生班付「歯科巡回診療時携行材料ニツイテ」という謄写版刷り10ページを参考資料として最も苦労したであろう戦地における歯科治療椅子の製作方法がABCの三図で図解されている．Aハ歯科医　内容，穿盤器ヲ分解シテククリ付ケ置ク．木具ヲ応用シテ治療椅子トセルモノナリ．予メ頭部ノ安定トナルヨウ加工シ置ク方便利ナラント思考ス．B図ノモノヘA図ノ場合ヨリ椅子ノ小ナルモノニシテ支柱ニテ椅子ノ転倒スルヲ防グ．C図ノ場合ハ椅子ノナキ場合ニ治療台トセシ時ノモノニシテ横木ニ枕ヲ結ビ付ケ安頭台トシ丸腰掛ヲ椅子トセリと解説されている．また携行治療機器として 1．歯科用穿盤器一具，注意　前述ノ如ク穿盤器ククリ付ケノ木具ハ椅子ニククリ付ケ安頭台ニ利用シ得ル如ク工夫スレバ便利ナリ，2．治療器機及消耗品，3．薬品及消耗品，4．救急用繃帯材料一揃とあり「右ヲ一個ノ（トランク）ニ納入シ得ル如ク工夫スレバ便利ナリ．尚戦時ニアリテワ第一戦部隊ノ巡回時ハ如何ナル変事ニ相遇スルヤモ知レズ一旦急ニ望マバ歯科医モ又負傷者ノ治療ニ任セザルベカラズ．余モ亦実際ニ此ノ事ヲ痛感セル事シバシバアリ，依テ歯科医出張時ハ要スレバ軍医携帯嚢或ハ之ニ代ワルベキモノ携行セシムルモ徒事ナラズト思考ス．其他私物トシテ適宜携行スルヲ要スルモ出張日数ニ応ジ最小限度ニ止ムル事肝要ナリ．以上ノ携行材料ヲ見ルニ，一見スル時ハ目的地ノ医務室備付物品ヲ使用スレバ事足リ携行ノ必要ナキ如ク考ヘラルルモ実際ニ於テハ，討伐ニ出動シ何等材料ノナキ場合アリ，亦隊ノ移動ノ直後等ニ於テハ僅カニ看護兵一名ノミ残留セル場合等アリ